

檻の虎



ANDREW ROBINSON 著

ストーリー

ANDREW ROBINSON

イラスト

LUKE MANCINI

編集

MEGAN WALKER

デザイン&アートディレクション

SOPHIE ERB

クリエイティブ・コンサルタント

JEFF CHAMBERLAIN, CHLOE FRABONI, MIRANDA MOYER,
NESSKAIN, DION ROGERS, JUDE STACEY

プロダクション

BRIANNE MESSINA, CARLOS GARCIA RENTA,
TAKAYUKI SHIMBO, JT TORREA

翻訳

WATARU HIRATA



Blizzard.com

© 2026 Blizzard Entertainment, Inc. BlizzardおよびBlizzard Entertainmentのロゴは、米国およびその他の国における Blizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。

Published by Blizzard Entertainment.

このストーリーはフィクションです。本作品に登場する名前、キャラクター、場所、出来事は、著者または作画者の想像による産物または架空のものです。実在する人物（存命中または故人）、出来事、団体、場所に類似するいかなる描写も、風刺的な意図はなく、偶然によるものです。

Blizzard Entertainmentは著者や第三者のウェブサイトもしくはそのコンテンツを管理しておらず、またそれらについて一切の責任を負いません。

檻の虎

シオンは幹部会が開かれる大部屋に向かって闊歩していた。幹部たちはさすがに恐れ多いと思ったか明言こそしなかったが、連中が自分を呼んだ理由なら見当はつく。敏郎に作らせた例の武器——ヴェンデッタに渡すはずだったそれらをオーバーウォッチに確保され、彼らはその理由をシオンに求めているのだ。

「茶番に時間を割いてる余裕はないんだよ」

シオンは憤った。

「ミズキとヨーカイの連中は今もこの敷地にいる。このままミズキを取り逃す羽目になったら……その時は街中を火の海にして、あいつをあぶり出す」

シオンを除く幹部たちはまだ、ヨーカイがこの拠点に忍び込み、シオンが厳重に守っていた囚人を解放したことすら知らない。だが、一番の痛手といえばミズキだ。シオンの庇護のもと、十年以上の月日をかけて育ててきたまさにこの場所で、ミズキは自身に牙を向いた。手塩にかけた子飼いの裏切りに比べれば、囚人の脱走など些細な出来事に過ぎない。

「覚えてな、ミズキ」

シオンは独り言ちた。

やがて幹部連中の話し声が聞こえてきた。シオンが大部屋に入ると、部屋の椅子に腰かける幹部の一人、尾形虎珀の目と虎柄のジャケットがぎくりと動いた。

「これはシオンの姐さん、待ってましたよ」

「やかましい!」

シオンは怒号とともに大部屋のドアを勢いよく閉めた。その衝撃の激しさか





ら、大部屋全体の電飾が揺れ動く。シオンの目が琥珀へとしばらく留まった。
「間抜けツラ晒しやがって。お前のその虎の背広はただの子供だましか？」

シオンの怒りを察した琥珀の顔が青ざめる。

「すみません」

琥珀の隣にいたのは、扇子を仰ぎながら平静を装う芹沢椿だった。彼女の五十代の顔はむきみ隈——若さと好色を表した歌舞伎の隈取——で覆い隠されている。

「シオンさん、こんなにも早く……来てくださるとは。お忙しいところ感謝します」

「あたしを呼んだからには重要な話だろうね？」

シオンは椿に噛みついた。

「真っ先に始末しなきゃいけない連中がいるんだよ」

椿の隣にいるのは伊集院矢右衛門だった。貫禄の出た六十代の身体を紋付き袴で着飾った彼は、目の前の机へと大きくかがみこみ、上座にあたる席をシオンに示した。

だが、シオンは幹部たちの“待ち伏せ”を察しているかのように、大部屋を見回すと指定された席を無視した。

矢右衛門は椿の顔を横目で見やるが、彼が厚化粧から察せるものはない。
「シオンよ、ワシらはただハシモト組が置かれている状況について話し合いたいだけだ」

「何だ。シノギを回して、組の勢力を広げてやってるあたしに不満か？」

矢右衛門の身体がぎこちなく揺れ動く。

「先ほどの件……タロンとの提携を考慮するに何かと不都合が多い。その……道楽もそこそこにして、組の運営にそろそろ集中するのが得策だと思ふのだが……」

その言葉の意図を察せなかったシオンは矢右衛門を横目で見た。

琥珀がほくそ笑む。

「つまり、姐さんは宴会三昧でハシャギすぎだって、この矢右衛門の爺さんは言いたいわけですよ」

睨みつける矢右衛門をよそに琥珀は笑った。

シオンは、当時の幹部連中から受けたスパーリングの傷をトレーニング・ルームの冷たいベンチに繋がれたまま舐めていたかつての自分を思い返した。あれから時が過ぎ、自分の状況は大きく変わったが、今度はこのクズどもが私

を鎖に繋ごうとしている——。

「愉しんで何が悪い？ あたしがお前らに代わってきっちりと仕事を果たして
ることを忘れた訳じゃあるまい？」シオンは言った。

「それでも、あたしの仕事にケチつけようってか？」

彼女の手はすでに、ホルスターにある敏郎作の銃へとかかっていた。

シオンの言葉に反応したのは、大部屋にいる幹部の最後の一人・ホルバート誠羅だった。ブロンドの髪を結わき、威厳あるポニーテールに整えていた彼女は、机へとうつむいた。

「シオン、誤解だ。私たちはただ、これからの方針を聞かせてもらえたら
と……」

「誠羅はお前らと違って立場をわきまえてるぞ」

こいつもうやうやしい態度を取っているだけで、裏では自分を引きずり降ろ
そうと画策しているのだろう——そう思ったシオンだったが、誠羅に応じて考
え直す素振りを見せた。

そんなシオンを椿は扇子で促した。

「今日の一件について……“事後評価”を行うのはどうでしょうか？」

シオンが不敵な笑みを浮かべる。

「事後評価だ？ お前らはマーケティングの連中か何かか？ いつから能書
き垂れるだけの腑抜けになったんだ？」

「今日の駅での取引」

椿は続けた。

「オーバーウォッチの介入によって、タロンへの武器の提供量が当初の約束
より大幅に下回った結果、我々の今の勢力を盤石にするまたとない機会を失
ったかもしれないのです。どうしてあなたが——いえ我々が、このような結果
を招いてしまったのか、どうしたら未然に防げるのかを考え、場合によっては
よつとした計画変更を——」

「お前は文句を言える立場か？」

シオンは息巻いた。

「先代の幹部連中をあたしがどうしたか、お前、忘れてないだろうな？ あた
しを“練習台”にして、自分の欠格を晒したあいつらのことを。あたしのおかげ
で、この組の影響力はかつてないほど広がってるんだぞ」

「確かに今はそうかもしれませんが」

椿も反論した。





「ですが、あのヴェンデッタとやらは——」

「あの蛮人が」

矢右衛門が唸った。

「自分の利益のことしか目に入っていない女だ。タロンにとってこの組は手先も同然。連中と手を組むことをワシは最初から——」

「だから何だ、この東京は今じゃハシモト組のシマだ。お前はあたしに任せてりゃいいんだよ」

「もしこの一件でヴェンデッタが不満を覚えたらどうする気なのだ？」今度は誠羅がシオンに聞いた。シオンの睨みが彼女に移る。

「もしケジメをつけろと言ってきたら——？」

「勝手に喚かせておけばいい」

シオンは鼻で笑った。

「一番重要なブツは渡した。お前らがそこで胡坐掻いてる間にあたしがな。そもそもオーバーウォッチが襲撃してきたのも、連中に仕掛けて潰せないままでいたあの女が悪い」

「シオンさん、不躰とは思いますが、組が強くなったと言ってもそれは思い込みに過ぎないのでは？」

椿が異議を唱える。

「これまでに得てきたシマやシノギ、それと製造した武器をタロンの支援なしで守るのは難しいというのに、ヴェンデッタは今も軍を撤退させている。彼女との提携が崩壊しかけているも同然の状況で、なぜあの列車に警護をもっとつけなかったのですか？」

「文句言うなら、おまえの部下を先に寄こすのが筋だろうが、椿。矢右衛門、誠羅、虎珀もよ」

矢右衛門が机を叩き、前のめりになった。

「東京を明け渡したら、組のツラを汚すことになるのがわからないか、貴様は！ そうなったら最後、頭の顔が立たんだろうが！」

シオンは空いている手を自身の顎へと添えた。彼女がかつて作らせたマスク——美しさと不気味さを併せ持った、この世界における表の顔——の縁に鋼の指を入れると、シオンはそれを顔から引きはがす。その下にあったのは、かつての幹部による暴行の数々で歪み、欠けたオムニックとしての素顔だった。シオンが矢右衛門の前にかがむと同時に、視覚センサーの赤い光がフェイス・プレートの表面に鋭く浮かぶ。目の前にいる男の冷や汗を見るや、シオ

ンの首筋が威嚇するかのように赤く灯った。

「あいにく、顔を潰されようがとくに痛みを感じないんでね。お前はどうか、矢右衛門。その上っ面をここで剥いでやろうか？」

息を止めることしかできなかった矢右衛門はやがて頭を垂れた。

「出すぎた真似だった……」

「わかればいい」

シオンはそう言うと、脱いだマスクを顔に被せ、不意に背筋を正した。顔に浮かぶ満面の笑み——それは素顔を晒した時よりも不気味さ際立つものだった。

「さて」

シオンは尋ねた。

「これ以上質問がないなら、そろそろ話してもいいか？」

目の前の幹部たちは何も言わない。

「タロンに送ることになってた武器は、ウチで保管してる量と比べりゃたかが知れてる。それに、あいつらと提携を結んでる間、あたしたちはこの東京をぶん取り、敵対する残りの組二つを潰して、サツに部下を送り込めた」

机へとかがみこんだシオンは言葉を強調するとともに、そのチタン製の固い指でその表面を激しく叩いた。

「オーバーウォッチも、タロンも、あのカネザカのカギ共も、勝手にさせておきゃいい。いいか。この組に必要なのはな、自分のモンをきっちり守れる牙と気概なんだよ」

シオンは背筋を正し、両脇のピストルに手を添えた。

「面子が潰れるだの何だの言うなら、まずはあたしに従え。次齒向かった時は、その頭を吹き飛ばす。代わりになる首はいくらでもあるってことをその席にこの先もいたきや覚えとくんだな」

